

平成 23 年度 セントラルパーク構想提言業務  
最終提言書

平成 24 年 3 月

安藤忠雄建築研究所

## セントラルパーク構想に向けて（提言）

# 『心を咲かせる』

～浜松市民の心のセントラルパーク～

### ■ あるものを活かした、これからの 100 年を超えていく公園として

## 魅力ある都市・文化・歴史資産を存分に活かした計画としてください

市制 100 年を迎えた浜松市。浜松城を中心としたセントラルパーク構想は、魅力ある都市づくりの象徴的存在となる事業であると考えています。ここでは、浜松城をはじめとした、既存の魅力ある都市資産を最大限に活かしたまちづくり、浜松の歴史を踏まえつつ、これからの 100 年を超えていける公園となるような提案として下さい。「浜松城公園」らしさを継承した、地域の核となるセントラルパークを目指して下さい。

### ■ 地域の核

## 浜松の都市創造のシンボルとなる計画としてください

浜松の都市景観はよく整備されて美しいものの、核がないことから都市全体としてのまとまりを欠いている印象を受けます。この状況を改善し、浜松らしい都市の創造には、この浜松城公園こそが都市全体をまとめるシンボルとなって、景観と文化を人々の生活へとつなげることが重要だと考えます。

### ■ 市民とともに成長するまちづくり

## 市民が誇りをもてるような仕組みを創ってください

観光客の誘引も浜松にとっては大きな目標ではありますが、なによりもまず、そこに暮らす市民が自分たちのまちに誇りを持てるようなまちであることが大切であり、そのためにも都市が市民と共に育っていくようなまちづくりをしていかなければならないと思います。そうすることで都市そしてそこに暮らす市民に活力がみなぎり、まちや人の魅力が高まることで更に人が集まるまちになる、と考えます。市民にとっての心のシンボルとなるセントラルパークを、市民と共につくっていく——そのストーリーをつくっていくことが重要です。

徳川家康ゆかりの浜松城は、別名「出世城」と呼ばれています。その名に象徴されるように、浜松からは多くの人材を輩出してきました。次の 100 年を見据え、市民とともに成長するまちづくりと、その核としてのセントラルパークの姿や考えを提案していきたいと思えます。

## 浜松の都市

### ■ 浜松はどんなまちか

元は浜松城を中心としたエリアが市の中心でありました。現在は浜松駅を中心としたエリアに商業の中心は移り、産業や生活の場は郊外へと移っています。

浜松は日本を代表するモノづくりのまちであり、また、家康を始めとして多くの人材を輩出してきた土地でもあります。歴史と文化、ヒトそして技術があるまちです。

浜松人の気質として「やрмаいか」精神、進取の気質が息づいていると聞きます。その反動か、新しもの好きで先取りの精神に長けるようですが、長続きしない。即ちリピーターになりにくいと聞きます。しかし「本物」に対しての「目」はどこよりも強いのだと思います。

都市に目を向けてみると、時代のニーズに合わせて様々な整備は行ってきたので、アイテムとしては充実しています。しかしながらまとまった都市の方向性でのまちづくりがされてこなかったように見えてしまいます。歴史資産にいまひとつ気に留めてこなかったように思います。

まとめ：浜松という都市、即ち人、時間、まちを全てひっくるめての「都市」に対するハートがなかった、思いがひとつになってこなかったのかもしれない。

### ■ 美しいが、何かが足りない

浜松の中心市街地は道も隅々まで整備され、電柱もその多くが地中化されるなど、他都市と比べても広く美しい。しかしながら、そのゆったり感も距離感・スケール感が人のそれとは距離が出来てしまっているように感じ、まちはきれいなものの何かが足りないという印象、つまり人の活動するまちとしての魅力に欠くような印象を受けてしまいます。また、歩道なども広く歩きやすいのですが、歩きたくなるような道にはなっていないのでは、と思ってしまう。街路樹も少なく、また、「辻」や「溜まり」がないことも要因なのかもしれません。

### ■ 『核』が感じられない

都市において必要と思われる『核』となるようなもの、『軸』となるようなものが感じられません。そのことで、都市として中心がなく、散漫な印象を受ける結果となっているものと思われます。浜松の玄関口である浜松駅から都市の象徴たる浜松城天守閣への視界が通らないことも、徳川家康からの歴史都市を標榜しながらも、浜松らしさを感じさせない要因ではないでしょうか。浜松城の力、歴史性、都市のシンボル性などを活かし、散在する都市の魅力を結束することで市民の誇れる浜松らしい浜松になるのではないのでしょうか。

# 浜松城公園について

## 現在の問題点

### ■ 顔がない、軸がない

現在の浜松城公園は、どこから入るのか、都市的に見てセントラルパークとしての顔がありません。建物に遮られ、公園自体が背後化しているだけでなく、そのゲート空間もアプローチ空間もなく、公園らしい高揚感すら感じません。公園に行くまでの道中の楽しみもありません。

### ■ 集まれる場所がない

都市公園とは市民の憩いの場であり、活動の場である、即ち市民の集まる場所であると考えますが、現状では芝生広場はありますが、雑然と場所が配置され、うっそうと茂る雑木に裏山の風体にも感じられ、いきいきと人々が活動する姿が想像されません。

### ■ エリアごとの個性がなく、メリハリに欠ける

もちろん都市公園がその全てをハレの場にするべきではなく、エリアごとに、それぞれ伝えるべき、提供すべき内容によって姿も異なるはずです。しかしながら、現状ではそれぞれの場に対する明快なテーマと設えが感じられません。

## 公園整備の方向性について

### ■ 人が集まる公園づくり

公園とは何よりも人が集まり、憩い、生き生きと活動する場であるべきです。市民の創造を促す様々なステージをつくっていかねばならないと思います。

### ■ 心の拠りどころとなる公園づくり

市民の暮らしの中での様々なシーンで、記憶で、セントラルパークが登場する。そのような、浜松の市民の心にいつもある公園であってほしいと思います。

### ■ 市民の誇りとなる公園づくり

浜松の歴史や文化の象徴そして発信拠点であり、都市のシンボル、顔として、ゲートとして、浜松市民の誇りとなるような「浜松らしい」公園にしていかななくてはならないと考えます。

### ■ 既存の特徴を活かしてつくる公園

浜松城公園の地形は起伏に富み、城の配置も非常に特徴的です。何もかもを刷新してしまうのではなく、既存の地形や配置、場のもつ記憶を活かし、市民にとっての活動の場、創造の場となる公園としていかねばならないと考えます。また、それらと市内に点在する歴史的な遺構とをリンクし、広く浜松の歴史文化を発信することが大事です。つまり、歴史的な資産を十分に活かすことが重要なのです。

### ■ 安全と安心の場としての公園

もちろん有事の際も、ここに来れば安心できる、という市民の避難場所として、防災機能もより充実しなければなりません。

## 継承すべき「浜松城公園らしさ」とは・・・

- ・ 浜松城の歴史的遺構
- ・ 変化に富んだ地形と豊かな植生
- ・ 自然豊かな公園と一体となった教育施設
- ・ 落ち着いた文学との対話

## コンセプト案

### ■ 歴史を継承し、未来へとつなげる

**浜松城の歴史的遺構を読み解き、有効に再現・活用して立体公園として再生します。**

浜松城の持つ高い歴史性を尊重し、発掘調査等の成果を踏まえた上で、それらを有効に再現・活用し、後世に継承します。また、その成立の基礎となった変化に富んだ自然地形を利用して、緑豊かな「立体公園」として再生します。

### ■ 再生のシンボルとして、桜・松を植える

**公園としての魅力をより一層引き出すため、浜松城公園を象徴する桜、そして浜松市の木である松を植樹します。**

人が集まる場を創造するために、「桜」を植えることを考えます。古くから日本人の心を束ねてきた桜は、人が集まることへの象徴でもあると考えるからです。桜は公園に季節感を与え、浜松城と人々とを仲立ちしてくれます。春には満開の桜の下に浜松中の人々が集まり、寄り添い、さまざまな人と時間、場、記憶を重ねていきます。

その桜をまちへとつなげていき、まち中に桜のネットワークが構成されれば、セントラルパークは更にまちの核として、より深く都市と、暮らしとつながっていくこととなります。セントラルパークからまちへ、まちからセントラルパークへと、桜並木など歩きたくなるような道をつくることで、都市の風景だけではなく人々の都市の捉え方、心も変わってくると思います。

公園としての魅力をより一層引き出すため、浜松城公園を象徴する桜、そして浜松市の木である松を植樹します。エントランスゾーンには、セントラルパークの新たな顔となる「ゲート広場」を設けます。また、主たる動線にそって桜や松の並木などを設け、人々を公園へと誘導します。

### ■ 水を有効に活用し、現代の堀を再現する

**浜松城公園内の水を引き込み、大手通り沿いを巡らせることで、都市に水際の風景をつくります。**

かつて城郭の周りを巡っていた堀の風景。それを現代版に解釈して再生し、都心において安らぎと憩いの水際の風景を創出します。

## ■ 育てる

### **花や緑を市民と共に育てるシステムを考え、人々の心のよりどころとなる公園をつくります。**

市民とともに浜松城公園が成長すること、都市が成長することをより強く感じ取ってもらうために、花や緑を市民に育ててもらえるシステムがあってもよいのではないかと考えます。街路樹や公園内の植物の一部を市民自らが育てることで、市民の公園や都市に対する愛着が増してきます。

そのときセントラルパークは浜松の市民にとっての心のシンボルとなり、『心のセントラルパーク』が完成します。市民が育て、育てられることで、公園そして都市が単なる場所ではない、何よりも市民の誇れる場所、心の拠りどころとなっていくのだと考えます。

## ゾーニングや施設

公園のゾーニング、及び必要施設に関して、ここでは提言の一環として、一例としてのアイデアを提示させていただきます。

### ■ ゾーニング

#### 公園の顔となるべきエリア — ゲートエリア「文化と交流の広場」

大手通り沿いは浜松城公園にとって、人々を迎え入れ、そして様々な活動が繰り広げられる、まさに「顔」となるべきエリアです。市民が集い、文化が発信される、そのようなエリアと位置づけます。人が集まる場として、そして公園のゲートとしてのゲート広場と、浜松の文化を創造・発信する施設機能が考えられます。

#### 浜松城天守閣を中心とした歴史公園 — 歴史エリア

浜松城天守閣を中心としたエリアは、その歴史的遺構を有効に活用し、浜松に脈々と流れてきた時間・歴史を感じ、楽しむことが出来る歴史公園としてしつらえることがよいと考えます。歴史という資産を活かすのです。

#### 地形と植生が豊かな公園 — 公園エリア

日本庭園の周りの起伏に富んだ緑豊かな公園エリアは、市民の憩いの場として四季折々、より魅力あふれる公園づくりを目指してほしいと考えます。また、既存の豊かな起伏は公園を平面だけで考えるのではなく、いくつかの魅力が立体的につながっていく立体公園（庭園）とすることも可能かと考えます。施設機能が必要な場合も、屋上を立体庭園として結ぶことで、公園と一体となったものとする事が出来るのかもしれない。

#### 落ち着いたある文芸との対話 — 文藝庭園エリア

北側エリアは、浜松城を中心とした南側のエリアと趣を変え、文芸を中心に据えた落ち着いたある庭園エリアと位置づけます。茶室を核に、文芸サロンなど展開することが考えられます。

#### 自然の環境に恵まれたこどもたち — 学校エリア

公園南側と北側の豊かな緑にかこまれた位置を学びのゾーンに位置づけ、誇り高く豊かな環境の中で学校生活が送れるように考えます。

#### 問題！ 浜松城への視界が遮られている

現状において、浜松市の玄関口である浜松駅からの「都市の眺望」が市役所建物により遮られています。これも都市の顔としてのセントラルパークを考えていくに当たっては解決していかなければならない問題点です。

## ■ 施設等の考え方

### 文化センター

浜松は工業デザインにおいては他都市に勝っています。工業デザインはいわば浜松の文化でもあり、その上に立ち、文化センターも新たな教育文化会館として、ホールや練習場などの市民の文化活動の場としての機能充実のみならず、文化創造センターとして浜松が誇る工業デザインという文化を通しての、交流、創造、発信の場になっていかななくてはならないと思います。また、それには地元企業が積極的に関わっていくことも重要です。

また、機能は出来るだけ地上から突出しない施設とすることが、公園の風景を守りながらも公園内の交流発信拠点として公園とともにあるべき姿ではないかと考えます。

### 新美術館

美術館は浜松城公園の豊かな起伏を活かし、公園の風景を守りながら出来るだけ機能は地上から突出しない施設とすることで、上部には立体的な公園、内部にも立体的で創造的な空間が出現、感性を磨くに相応しい創造的な空間の創出が可能であると考えます。

### ゲート広場

桜や松を植えながら、名所である浜松城公園と呼応していきます。災害時には防災公園として機能できるような装備を併せ持ち、市民にとっていつも共にある公園を目指します。

### イベント広場（現芝生広場）

現芝生広場は、憩いに、スポーツに、イベントに、より市民の気軽な利用や創造的な活動を支えるための環境の充実が必要と考えます。客席状のひな壇であったり、トイレやカフェスペースなどが考えられます。

### 小中一貫校

現中学校をより拡充しつつ、建物は屋上をデッキでつなぎ緑で覆うなど、あるものを活かしながら更新を図ってはどうかと考えます。グラウンドについては不正形であり面積的以上に使い勝手が悪いものと思われますので、北側谷地も取り込むように拡張するのがよいかと考えます。その場合段違いのままとするか、造成するか、はたまた人工地盤とするかの検討が必要です。

### 文学の庭

北側の敷地では、茶室を中心として、文学文芸をキーワードに、和風の庭園と散策路で展開される文学の庭を提案します。周囲を竹林で囲み、都市の中で最も静かな空間として設え、



浜松の文学文芸を軸に、文学に向き合う、南側とは好対照な静の場です。現文芸館については移転が予定されるそうですが、市民がより文学文芸に気軽に触れあうことの出来るような文芸サロンとなるべく施設があってもよいのかもしれない。

## **園内通路**

起伏に富んだ公園内において、アプローチ空間も重要な要素です。四季折々季節の風景を楽しみながら、自然と奥まで足を運んでしまうような、魅力的な散策路でありたいと思います。特にメインとなるアプローチ（天守閣、イベント広場周回、美術館方面、文学に庭方面）は桜並木として、都市からつながるようなイメージを考えます。

## **駐車場**

大手通りに面するゲートエリアの一部、文化センターを計画している一角の下部に、防災機能と共に駐車場を設置する考え方がよいのではないのでしょうか。景観的にも、また、有事の際にも都市機能に寄与できるのではないかと考えます。

## 最後に

セントラルパークが浜松という都市の顔として、ゲートとして、市民の誇りであり、心の拠りどころとしてより豊かな空間になっていってくれたらと思います。



